

2003

日本画制作の現場

報告：北田克己

本研究¹は、教育支援の一手法として、芸術資料館での企画展示を通じた多様な美術体験の機会拡大を図ったものである。同時に地域芸術文化、教育拠点としての芸術資料館の可能性を探る試みに位置づけられる。展覧会、関連プログラムは全て一般公開された。

同テーマに基づき、2002年八木幾朗氏、2003年片桐聖子氏、2004年河嶋淳司氏を招聘して展覧会を開催した。いずれも現在の美術状況に深くコミットしている重要な作家である。

展示による作品紹介と併せて作家を招いて親しくその人間性に触れ、創作者の内面に迫るのがこの研究の目的である。そのため展覧会に関連する教育プログラムの充実が必須であった。

多くの美術施設が自ら認めているように、教育はその重要な機能のひとつである。本研究で実施された教育プログラムは学生教育に視点を据えたプログラムでありながら、幅広い鑑賞者に創作、芸術活動という人間の営為に対する理解と深い印象を与えてきた。

2003年実施の片桐聖子展では、アイデアスケッチから大作の代表作まで50余点が出品され、創作の内面的軌跡を辿る上で充実した展観となった。

それ以上に会期中に実施された関連プログラム²が反響を呼び、

特に公開制作は、予定の時間を超え3時間近くに及んだにも拘わらず満席の会場を立つ入場者もほとんど無く、臨場感溢れる美術ライブとなった。

これは片桐氏の周到な準備とロジカルな制作過程に依るところが大きい、何より楽しげな制作態度に見られる創作の喜びが多くの人の心を打った。

芸術資料館を活用したこのような教育的取り組みには継続性が求められていると認識しており、資料館の体制、活動のさらなる充実が必要であろう。今後の課題である。

1…研究の目的、背景また実施成果については、2004（平成16）年学部紀要において「日本画制作の現場「八木幾朗展」」報告として詳述している。

2…シンポジウムでのパネルディスカッションについては2005（平成17）年学部紀要に所収。



